

近世の紀行文 10 選

奈良県立大学 名誉教授
西田 正 憲

1. はじめに

古代から近世にかけて瀬戸内海を記述した紀行文は数多い。本誌 25 号から 41 号にかけて紀行文 91 編を紹介してきたところである。近世までの人々の風景の見方は歌枕、故事、神話、伝説、宗教の地、つまり歌枕名所の風景に強くとらわれていた。しかし近世には一方で、現代の風景の見方に通じる新しい変化が芽生えてくる。客観的合理的思考を培った武家や商人たちが歌枕名所の風景の桎梏から離脱し、自由に新しい風景を見いだしはじめる。紀行文における観照から観察へ、抒情から記録への転換であり、詩歌美文から風土観察記録への変化である。近世には長崎への旅、参詣の旅など全国を旅する人も増え、瀬戸内海も旅人の往来が盛んになる。江戸中期以降、瀬戸内海の風景の記述にも新しい変化があらわれてくる。今回はその中でも風景論の観点から特筆すべき 10 編を選んで紹介したい。

2. 建部綾足『紀行』1758 頃

建部綾足は江戸中期に俳人・画家として名をなした才人であり、晩年には幻想と浪漫の壮大な読本『本朝水滸伝』を著した小説家でもある。『紀行』は、1739(元文 4)年から 1758(宝暦 8)年までの旅に明け暮れた頃の全国行脚の 15 編の紀行文からなり、その中の「紀行浦づたひ」「紀行花がたみ」「紀行三千里」に瀬戸内海の旅をしるしている。俳句を交えた美しい雅文体の文章でありながらも、きびきびとした簡潔な文章で歌枕名所の風景ではない新鮮な風景を描いてみせる。「紀行浦づたひ」は、1750(寛延 3)年、大坂から船で伊予に向かい、さらに九州に赴く紀行文であるが、鞆の浦から御手洗に至る船で過ぎゆく芸予諸島の島々の眺めを次のとおり楽しむ。島々を「七十二芙蓉」と表現し、多くの蓮の花にたとえる。

日たけて鞆の浦を出る。弓削の塩浜を過るころは、追風を添て帆手打ならしくだり行。伊予の島山左右にならび、夕日はなやかに海を浸す。実や七十二芙蓉ともいふべし。

涼しさや艫へながるる山の数 (高田衛他校注『新日本古典文学大系 79』岩波書店 1992)

3. 長久保赤水『長崎行役日記』1767

長久保赤水は、常陸国の農家に生まれたが、学問好きで儒学者となり、水戸藩にとりたてられて藩主の侍講にまでなる人物である。地理学者でもあり、現代では「日本輿地路程全図」などの日本地図製作者として名高い。1767(明和 4)年、赤水は常陸磯原村(茨城県北茨城市)庄屋代理として水戸藩の使者に随行して長崎へ赴いた。2 年前に安南(ベトナム)に漂流した磯原村の船頭が長崎にもどってきたので、その身柄を引き取りに行くものであった。『長崎行役日記』はこの長崎行きの役を命じられた旅の紀行文である。

瀬戸内海へと大坂から船出する場面は地理学者らしく地理を客観的に捉えながら、広々とした眺望を楽しんでいる。厳島神社では「実に無双の壮観也」と絶賛したあと、宮島の標高 535m の弥山の頂上に登り、展望景を捉える。この弥山からの展望については、後述する遠山景晋は「諸しまの遠望、勝景なり」と、そして、吉田重房は「島々ことごとく眼下にあり。風景えもいはずおもしろし」と多島海を称えているが、赤水も次のとおり芸予諸島と広島城下を眺めて「甚だ勝景の地なり」と称賛する。

夫より弥山に登る。奥の院也。頂まで十八丁、石山にて赤松、梅樹、生茂り奇石怪巖の間に神社仏殿四十八宇、絶頂より東北の諸島広島の城下まで眺望す。甚だ勝景の地なり。常に殺生禁断故鹿猿多くあり。鹿は町家に群集し、舟まで来りて食を求む。(柳田国男校訂『紀行文集』博文館 1930)

4. 古川古松軒『西遊雑記』1783

古川古松軒は備中国新本村(岡山県総社市新本)の医師の家に生まれ、地理学者となった人物である。彼は全国を歩き、幕府の調査にも巡見使として従事し、老中の松平定信とも親交があった。1783(天明 3)年の山陽道・九州の紀行文『西遊雑記』と、88(天明 8)年の奥州・蝦夷地の紀行文『東遊雑記』は、当時の地方の状況を知る旅行記として高く評価されているが、風景論の観点からも特筆すべき文献である。

古松軒は、地理学者らしく、自由に観察する合理的な眼をもった人であった。厳島神社を見て、海内三景(日本三景)と称しているが、全国にはもっとすぐれた景勝の地が数多くあるとししている。古松軒は『東遊雑記』で全国のすぐれた自然風景 37 カ所を選んでいったように、全国の風景を客観的に見比べることができた。古松軒は現山口県の室積の松原を見て、須磨明石などの松原よりもすぐれていると感心する。次のとおり、都に近かったら賞賛された風景だが、都から遠いばかりに世に出ないとししている。

予画にうとくして此所の正景うつし得ず。都近くもあらば世に称すべき風景の浦なり。(中略)室積より半里、戸中浦、一里野原、此間の海浜松はらにて須磨明石などの松原よりも大ひに勝り、白砂に浮根の松の大樹数万本、筆に尽しがたき風景也。海内広き事にて、辺鄙の地にかかる勝景有りても誰れ知る人もなく、世にうつもれてある事なり。(柳田国男校訂『紀行文集』博文館 1930)

5. 遠山景晋『続未曾有記』1804-5

幕臣の遠山景晋は、1804(文化1)年、ロシアの艦隊を率いてやってきた使節レザノフと交渉するため、長崎に赴く。『続未曾有記』はこの江戸から長崎への旅の紀行文である。景晋は蝦夷地を調査した時の紀行文『未曾有記』なども著している。景晋は舞子の浜に感動し、明石海峡兩岸を観察して次のとおりしるす。

舞子の浜は松樹百千、種々の曲蟠根、庭作りの工みに、洗ひし如く、枝葉清らかにて、渚より白砂奇麗に掃たてたる如し。磯馴まつのがたの、舞手に似たれば「舞子の浜」と唱にや。古詠は聞及ぬに、又なき妙景なり。往還の漸々海近く、淡路山、絵島がさき、岩屋など、次第に出ではり、松帆岬とて、明石より、さしわたし五十余町と云。山足の、人家も見へ、西風吹出るままに、兵庫、あるは浪花にはせる商船の、順風に真帆かけて矢を射るごとく、つづきたり。

(板坂耀子校訂『近世紀行集成』国書刊行会 1991)

舞子の浜は景晋も「古詠は聞及ぬ」と述べているようにこの頃台頭してきた風景である。後述の大田南畝も「枝しげり根蟠りて、手の舞ひ足の踏かと疑ふ」と愛で、吉田重房も「画景に異ならず」と見入っていた。

6. 大田南畝『革令紀行』1804

大田南畝は、若くして江戸の狂歌師、洒落本・黄表紙作家として知られた文人であるが、幕臣としても大坂、長崎に勤務した有能な官吏であった。蜀山人の名が広く知られている。『革令紀行』は、1804(文化1)年、南畝が江戸から長崎に赴任する時の、大坂以西の旅をしるした紀行文である。革令とは甲子の年を意味する言葉で 1804 年を指している。長崎勤務を終えて江戸にもどる旅は『小春紀行』に著している。

南畝は道中のいたる所で広く見渡した風景を楽しんでいるが、備讃瀬戸の島々や讃岐の山並みも次のとおり堪能して、そして、飽きてしまう。讃岐富士とよばれる飯野山を白峰にとりちがえたようであるが、他の紀行文にもそのような記述が見られるので、そのように誤って広まっていたのかもしれない。

これより左は志度のかたにして、右になだらかなるは八島の山なるべし。直嶋といふもすぎて、北は日比の湊なり。(中略)南に富士の根の形したる山はるかにみゆ。これ白峯にて、俗に四国の小富士といふものなりと舟子どもといふ。白峯より右に象頭山みゆ、今朝より多くの嶋山を見つくし、いたくうみたらば、船屋かたにいりてうたたねす。(高野義夫発行『蜀山人全集巻一』日本図書センター1979)

7. 吉田重房『筑紫紀行』1806

『筑紫紀行』は、尾張の商人吉田重房(商人名は菱屋平七)が、1802(享和2)年、名古屋から京、大坂、金毘羅、宮島、長崎に遊覧の旅に出向いた紀行文である。最初から出版を意図した書籍であり、刊行後広く流布した。商人ならではのであろうか、従来にはない自由で新鮮な見方を随所で行っている。

大坂から瀬戸内海へと出帆する時、前述の長久保赤水と同様、山々や浦々里々を一望して「眺望の景勝言語に絶す」と感動する。船で西へ進んで屋島(八島)、八栗山(矢くりが嶽)、飯野山(飯山)などを眺めて、日比、下津井を通りすぎ、塩飽諸島の多島海を「小島は数しらず見えて、景色華麗いはむかたなし」と賞賛する。重房はまた船の旅で、多島海の島々のシークエンス景を楽しみ、島々が動く風景として見えることがおもしろいと次のとおりしるしている。

すべて島々の海中に浮てみゆるは、盆に水を湛へておもしろき石どもを入れをける如くにて、何所にあるも佳景ならぬはなきを、船をすすめながら其をながむるは、状態種々に変化して、譬へばかの盆なる石どもをいろいろととりなをし見るに似たり。此方は動かずして、彼方のうごくやうなるぞおかしかりける。(谷川健一編『日本庶民生活史料集成第二十巻』三一書房 1972)

さらに重房は、海路ばかりではなく、陸路からの多島海も楽しみ、帰路の三原から糸崎にかけての芸予諸島を林泉つまり庭園のようだとし、「佳勝いはんかたなし」と賞賛していた。

8. 高木善助『薩陽往返記事』1828-37

高木善助は薩摩藩とのつながりが深い大坂の商人であり、1828(文政11)年から38(天保9)年にかけて、大坂と薩摩のあいだを6回往復し、瀬戸内海の大坂・下関間を船で航行していた。『薩陽往返記事』はこの大坂、薩摩を往復した克明な旅の日記である。「薩陽」とは、長崎を中国風に崎陽と呼んだように、薩摩を指す美称である。紀行文では善助は地名や島名を克明にしるしている。この頃は地理を表す道中記、船路記、図会などが普及していた。善助は旅の航路を鳥瞰図の絵で描き、『西陲画帖』として残してもいる。

善助は香川の弥谷寺から広大な風景を捉え、瀬戸内海の島々を「泉水の如く」と次のようにしるしている。前述の吉田重房と同様、陸上の視点から多島海を庭園のようだと愛でている。

頂上は、西の方西条辺、東より西へ西讃の山々・讃岐富士・白峯・丸亀城・善通寺の塔は直下に見へ、後山の五峯又象頭山は南方に聳たり。頭をめぐらして北方を遙に望めば、備前・備中・備後の山々海上の嶋々は、泉水の如く小山所々に浮み、塩飽七嶋・備前児嶋・下津井・日比・田之口辺・大妻・小妻・出崎の嶋山、皆眼中に鮮なり。又出崎地方の山を打越して瑜伽山を見る。(宮本常一他編『日本庶民生活史料集成第二巻』三一書房 1969)

9. 川路聖謨『長崎日記』1853-54

幕府勘定奉行の川路聖謨^{かわじとしあきむ}は、幕末の1853(嘉永6)年、海防掛としてロシア使節プチャーチンと長崎で外交交渉を行い、翌54(安政1)年、下田でさらに交渉を重ね、日露和親条約を調印する。『長崎日記』は長崎に赴いた時の日記である。聖謨は尾道から三原にかけての陸路からの瀬戸内海の風景を、須磨、明石などよりもすぐれている最高の風景だと絶賛する。内陸部を多く通る西国街道もこの辺りで海岸沿いに出ることから、多くの旅人がこの付近の多島海を見て感動している。しかし、聖謨は風景に対する感動にとどまらず、落葉ひとつない松山は薪不足によるものだと言及し、次のとおりしるしている。この尾道と三原の間の風景は帰路にも、箱根の湖のようだと絶賛している。

尾道より三原へ行くみち、大なる入江にて、十里ばかり有りという。所々に島みえて、画のごとし。唯今迄二十余国を過て、山水のけしき、舞子の浜、すま・あかしにても格別にはおもわざりけるが、きょうのけしきは唯今迄あらざる事にて、目を驚かせり。松山多けれども、落葉一ツなし。奇麗に掃除したる庭の如し。これは、山上迄も真土の所は畑にいたし、岩山はまつ生立ちたれば、薪不足にて落葉迄薪とする故なるべし。

(藤井貞文他校注『長崎日記・下田日記』平凡社 1968)

10. 清河八郎『西遊草』1855

清河八郎は、庄内藩出身の熱烈な尊王攘夷論者であり、新選組の母体となる浪士組編成の中心人物であった。1855(安政2)年、庄内(山形県)の母の願いをかなえて、伊勢参り、奈良・京都・大坂の三都遊覧、瀬戸内海巡りなど約半年の全国行脚の旅を行う。瀬戸内海の瑜伽山では、備讃瀬戸の多島海をはじめて眺めて、目が離せないと感動する。丸亀や金毘羅山からの風景も称え、多度津から宮島に至る海路では、芸予諸島がいわゆる瀬戸内であり、「天下第一の名勝」だと次のとおりしるす。

また走る事五里ばかり、尾の道沖にいたる。此より左右島々群がり連なり、いわゆる追門内といふ也。凡海路にて島の多き事天下第一の名勝にして、島にいづれも村々あり、田畑あり、大小雑りて山々浦々の景、或は岩石そびへ、或は松樹老しげり、堂塔寺宇処々にそばだち、いづれも呼声のとどかぬ島もなく、其間海水蒼々として波瀾静にして、さながら鏡中に異ならず。白帆の往還又釣舟、網舟落々として海上にみち、広がり、風光舟の行にしたがひ種々の変化をなし、誠に奇絶の舟行なり。

(小山松勝一郎校注『西遊草』岩波書店 1993)

11. 河井継之助『塵壺』1859

1859(安政6)年、越後長岡藩の武家の河井継之助^{つぎのすけ}は江戸から備中松山藩(岡山県高梁)に遊学し、さらに四国と九州を巡遊し、その記録を日記『塵壺』として残す。継之助は、遊学後藩の役職を昇りつめ、家老上席となる。北越戦争で官軍に敗れるその生涯はよく知られている。

継之助は須磨、明石などの名所遊覧を行うが、やがて瀬戸内海の新しい風景にとらわれ、「風景面白し」「風景好し」と清々しく語っている。玉島の円通寺から見る讃岐の山並みと備讃瀬戸・笠岡諸島の多島海は、富士山にも並ぶ今までに見たことのない快調の風景だと次のとおりしるす。

円通寺へ行く。右は山の頂にあり。禅寺にて、庭にて大石、古松、遠く讃州諸山を見、近く諸島、小島を見る。曾て見し富士に、擬す可き程に思う。暫く石上に休む。久しく斯かる快調の風景を見ざる故、別して面白き楽しみなり。

(安藤英男校注『塵壺—河井継之助日記』平凡社 1974)